

「ことばは力」

2010年1月24日

島根県雲南市大東中学校にて

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介頂きました山口県岩国から参りました佐古と申します。よろしくお願いたします。

今日は朝早くからトイレ掃除にお集まりくださり、本当にご苦労さまでした。特に中・高校生の皆さんがたくさん集まっておられることを大変嬉しく、また心強く思います。

実は昨日、こちらの方（大東町）に到着しまして、その時に参加者に20～30分程度話をするようにと依頼されました。正直、何の用意もないことで少しうろたえております。しかし、折角の機会ですから、お言葉に甘えて少し時間をいただくことにいたします。

この場には野球部の皆さんが多いということですから、野球に関しての話題を取り上げたいと思います。

みなさんのお手元に、主催者の方からスポーツ新聞のコピーが配られていますね。見出しには「雄星トイレ掃除」の文字が大きく踊っています。皆さんよくご存知の甲子園で活躍した花巻東高校の菊池雄星投手が、入団した西武球団の寮のトイレ掃除を志願しているという内容です。それによると菊池選手は高校の野球部のトイレを毎日ピカピカに磨いていたようです。



高校時代にトイレ掃除に熱心であったのは菊池選手だけではありません。

あのニューヨーク・ヤンキースで活躍していた松井秀喜選手も、星稜高校時代に山下監督の指導のもと、部員の中でも特に熱心にトイレ掃除に取り組んでいたのです。

プロ野球と高校野球を代表する2人の選手が、共にトイレ掃除に汗を流していたことに大きな興味を覚えます。

汚物が流れ、臭いのあるトイレを掃除することは、誰もが嫌がることです。その人の嫌がることを率先してやることは、困難に立ち向かう力や苦しみに耐える力を身につける上でとても大切なことなのです。

野球の練習の過程では、苦しいことがたくさんあります。その苦しさを乗り越える力を、トイレ掃除を通して身につけ、二人の選手は大成したのだと思います。

皆さんは、そうした意味で今日は大変良い経験をしたこととなります。この体験を今日の、この時だけのことに終わらせないでください。トイレ掃除に限らず、人の嫌がることを喜んで引き受ける人であってください。目の前に重たい荷物と軽い荷物がある時には、重い荷物を率先して持つ人であってください。そのことが皆さんに困難に打ち勝つ力を与えてくれるのです。

さて、先ほど紹介していただきましたように、私は地元岩国で「掃除に学ぶ会」のお世話をさせていただいていますが、その他に、郷土の先人たちのことば、それも若い人達にぜひ伝えたいと思うメッセージ性の強いことばを選び、それを石碑に刻んで建立する運動を続けております。つい先日も数学界のノーベル賞といわれるフィールズ賞を授与され、40代の若さで文化勲章を受けられた広中平祐先生の「創造のある人生こそ 最高の人生である」ということばを刻んだ石碑の除幕式を済ませたところです。その他に、これまで完成した石碑の写真のカラーコピーがお手元に配られているようですから、後で見ただけだと嬉しく思います。

ここではそれらの石碑のことばの解説をするより、なぜそのような運動を始めたかということについてお話しておきたいと思います。

皆さんは、シドニー・オリンピックの女子マラソンで優勝した高橋尚子さんのことを知っていますね。Qちゃんのお愛称で知られる彼女は、日本の陸上史上、女子では初めて金メダルをとった選手です。

その高橋選手を支えたことばがあります。

「何も咲かない冬の日も 下へ下へと根を伸ばせ やがて大きな花が咲く」

大きな花が咲く春の日だけが大切なのではない。むしろ何も咲かない冬の日こそ大切なのだ。人の目の届かないところでしっかりと根を張ること。そのことが、やがて大地の栄養分を吸い上げる根となり、大きな花を咲かせる要因になるのだ。

概略そのような意味ですが、高橋選手はこのことばを高校時代の陸上部の監督からもらったのです。そして、このことばが、練習が苦しくなって弱音を吐きそうになる時、また記録が伸びずに悩んでいる時、高橋選手を支える言葉となりました。

先ほど、少し話しました松井秀喜選手にも苦しい時を支えたことばがありました。

「竹は節があればこそ、まっすぐに成長する」

竹が、真っ直ぐに高く伸びるのは節があるからだ。全く伸びの止まる節の時代に、大きく真っ直ぐに伸びる栄養分が蓄えられる。松井選手は、このことばをお母さんから教わったのです。以来、彼はケガで苦しんだり、努力の成果が見えなかつたりする時ほど、努力が必要なのだと覚悟して懸命の練習を続け、自らの才能に花を咲かせたのです。昨年のワールドシリーズで彼がMVP（最高殊勲選手賞）を獲得したとき、彼の星稜高校時代の恩師山下監督は、マスコミのインタビューに答えて「松井選手は努力の天才」と称えていました。その彼の努力

の源は、お母さんから教わったことばだったのです。



の源は、お母さんから教わったことばだったのです。

今お話した山下監督も、ことばに奮起するきっかけを与えられた体験があります。今でこそ山下監督は甲子園の常連監督として全国に有名ですが、野球部の監督として全く芽の出ない苦しい時期があったのです。「自分には監督業は向いていない」と考え、何度か辞めようと悩み苦しんだのです。

そのような時でした。たまたま立ち寄った長野県のあるお寺の門前に「この道より われを生かす道なし この道を行く」と書いてあったのです。これは、大正時代の文学者、武者小路実篤が好んで色紙に書いていたことばです。苦しいから逃げよう逃げようとしていた若き日の山下監督の心に、このことばは鋭く突き刺さり、深く反省することになったのです。そして、それからは迷うことなく監督の仕事に打ち込み、やがて皆さんも知るように名監督として全国に名を知られるようになったのです。

このように、ことばには人を励まし、奮起させる力があります。

2007年の夏の甲子園で優勝した佐賀北高のことを知っていますね。県立の普通高校が、名の知れた私立の強豪校を次々に打ち破り、決勝では広島の高陵高校を8回の満塁ホームランで逆転して奇跡の優勝を果たした学校です。この学校の野球部には、素晴らしい部訓があります。「ピンチの裏側」という部訓です。

「ピンチの裏側」

神様は決して
ピンチだけをお与えにならない

ピンチの裏側に必ず
ピンチと同じ大きさのチャンスを
用意して下さっている

グチをこぼしたり ヤケを起こすと
チャンスを見つける目がくもり
ピンチを切り抜けるエネルギーさえ
失せてしまう

ピンチはチャンス
どっしりかまえて
ピンチの裏側に用意されている
チャンスを見つけよう

私が、この部訓の中で特に注目するのは、「グチをこぼしたり ヤケを起こすと チャンスを見つける目がくもり ピンチを切り抜けるエネルギーさえ 失せてしまう」という箇所です。

グチやヤケは目を曇らすというのです。私はこのことに関連して、佐賀北高の選手たちは、試合中に味方はもちろん、相手方の凡プレーに対しても決してヤジを飛ばすことがないと聞いたことがあります。そして、ファインプレーであれば敵味方を問わず、「ナイスプレー」などの賞賛の言葉を送るというのです。

これには本当に感心しました。今はどのようなものであるか知りませんが、かつては野球場に足を運ぶと、相手のプレーに対して時には聞くに耐えないヤジや罵声がベンチや観客席から飛んでいました。正直、私はこれが教育の現場だろうかという強い反発を覚えたものです。

ですから余計にこの佐賀北高の選手たちのマナーの良さに惹かれたのです。

それに、この相手のプレーを賞賛することは、単に人間としての正しいあり方だということに留まらないのです。

最近の脳科学者の研究によると、人間の脳にはミラーニューロンという細胞が組み込まれていて、素晴らしい人や感動的な出来事に出会ったりすると、その相手の行動を鏡（ミラー）で映し出すように脳の中に吸収しようとするとのこと。

つまり相手のファインプレーを賞賛すると自分でも気づかないうちに相手と同じように振舞うようになり、その人の能力アップにつながるのです。

だから相手選手にヤジを飛ばすことは、自らの可能性を閉ざすことであり、「ナイスプレー！」「ナイスバッティング！」と褒めることの方が、本人のためにもなるのです。

ゴルフ界のスーパースター、タイガー・ウッズ選手のエピソードを紹介します。

ある試合が、プレーオフになったのです。ウッズ選手が先に打ち終わり、相手選手がカップを外せば、彼の優勝が決まるという時のことです。相手がパットを打った瞬間、「入れ！」とウッズ選手は叫んでいたそうです。驚きます。凄いことだと思います。私なら心のなかで「外せ！」と叫んでいたと思います。

ウッズ選手は無意識のうちに相手の良きプレーを脳の中に焼付け、自分の成長に役立たいと願っていたのだと思います。つまり、彼にとって、その試合に勝つことだけが目的ではないのです。相手選手の良いところを鏡（ミラー）で映し出すように脳に焼き付け、もっともっと大きく自分を成長させたいと考えているのです。そのことの積み重ねが彼を世界の一流選手へと押し上げたのだと思います。

少し話が逸れてしまいました。「ことばは力」という話の話材として佐賀北高を取り上げていたのです。この佐賀北高の部訓を一言で表せば、「ピンチはチャンスだ！」ということですね。これは、どんなことがあっても試合を捨てることなく、みんなで歯を食いしばって頑張ろうという意味の合言葉です。この言葉のもとに一致結束して、甲子園で次々と逆転劇を演じ、ついには優勝してしまったのです。

ことばには凄い力があるものです。

もうひとつ例を挙げたいと思います。

この正月の全国高校サッカー選手権に、私の郷里山口県を代表して出場したのは、山口高校でした。この山口高校は県を代表する進学校として知られていますが、それがサッカーで県代表になったというので、地元は沸き立ちました。山口高校の県代表は30数年ぶりのことです。特別に優れた選手がいたわけではありません。夏の大会では予選の早い段階で敗退しているのです。その弱かった山口高校の選手たちが奇跡的な勝利を収めたのは、ひとつのことばを共有したからです。

「俺は弱い。俺たちは強い」

これが奇跡を起こしたことばです。

ひとりひとりの俺は、取り立てた特徴もなく弱い。しかし、弱い俺でも、俺たちとして結束すれば強いのだ。このことばを合言葉にして、県内では強豪校として知られ、毎年のように県代表になっていた高川学園高校を下して代表権をとったのです。

このように、ことばには力があります。

そして、こうしたことばが力を持つのは、苦難の時です。悩み苦しむ時、そこから脱出する力を与えられます。あるいは課題（テーマ）を持って生きる時に、大切な気付きを与えられます。私が、岩国にことばの碑をつくる理由も、まさにそこにあります

今日、ここに掃除のためにお集まりの皆さん、是非皆さんを勇気づけることば、座右の銘を持ってください。部活動を休止してまで集まった大東中、そして松江南高校の野球部の皆さん、是非皆さんの力となる部訓を持ってください。必ず皆さんが大きな力を発揮する原動力になることを保証いたします。

そして、今日同じ班で一緒にトイレ掃除に汗を流した松江南高校の皆さん、皆さんが甲子園への夢を果たすことがあれば、私もぜひ甲子園に駆けつけ応援したいと思います。

そのことを約束して、私の話を終えることに致します。

静かに聞いてくださったことに、心からのお礼を申し上げます。

ありがとうございました。